環境システム研究 Vol. 25 1997年10月

公共施設整備におけるものづくりワークショップ手法の適用性に関する一分析

A Study on Applications of Workshop for Building Pubulic Facilities

澤田俊明* 志摩邦子** 山中英生*** 秋田和美****
Toshiaki SAWADA* Kuniko Shima** Hideo YAMANAKA*** Kazumi Akita****

ABSTRACT ;

Town planning workshops are divided into two types; workshops for building facilities and making plans , and workshops for gathering information. The workshops for building facilities aim to provide public facilities for the town and are organized by residents, administrators, specialists and designers. In this study, we examined two building facility workshops; Suehiro Park in Tokushima city and a community center building in Shirasagi-dai in Tokushima city. Then we examined some of the problems and conditions encountered the workshop in order to make the workshop more successful.

KEYWORDS ; public facilities, public involvement, workshops for building facilities

1．はじめに

従来のJISに見られるモノの規格からISO9000シリーズに見られるプロセスの規格の制定、建設産業政策大綱での「エンドユーザーにトータルコストで良いものを安く」提供する基本目標の制定、そしてＰＬ法の制定など、近年、公共事業整備の視点は、従来のモノ中心の整備から質やプロセス重視の整備へと、生産者の視点から消費者・利用者の視点へと大きく転換している。このような状況の中で、ますます消費者・利用者としての住民参加の重要性が増している。

住民参加手法の一つの手法としてワークショップ（以下ＷＳの略記）手法があり、現在、多くの都市の様々な場面で広く取り入れられている。一般的なまちづくりＷＳでは、住民・行政・専門家の３者から構成されることが多い。本研究では、住民・行政・専門家の他に設計者の４者からなる公共施設整備における“ものづくり”ＷＳを対象に、ＷＳの課題や適用性などについて考察する。今回の研究では、街区公園整備を目的とした“末広公園ＷＳ”、地区センター建物整備を目的とした“しらさぎＷＳ”の２つの事例を取り上げる。末広公園の改修は、1997年３月末に実施設計が完了し工事着手前の状態であり、しらさぎ台地区センターは、1996年11月に実施設計が完了し、現在施工中である。

本研究にあたり著者らは２つのＷＳの企画・運営に参画し、ＷＳの内容と運営の観察、ＷＳ参加者へのアンケート調査及びヒアリング調査を行った。本研究では、住民の参加を直接に得たワークショップを「リアルタイム・ワークショップ（ＲＷＳと略記）」と呼ぶ。また、「行政」とは施設の管理、整備およびＷＳ運営に責任を持つ行政主体を意味し、「専門家」とは、一般の住民以外の行政・大学関係者・建築・土木・造園・美術等のＷＳの企画・運営者を意味している。

* 建設材料試験所 Kensetsu Zairyo Shiken-syo
** 大林組 Obayasi-Gumi
*** 徳島大学工学部 The University of Tokushima
**** 徳島市役所 Tokushima City Office

表－1　WSの利用目的による分類

大　別	細　別	内　容
ハード整備のためのWS	ものづくりWS	ハード施策として、施設整備を最終目的とするWS
	情報収集WS	ハード施策に至る情報収集を目的とするWS
ソフト整備のためのWS	プランづくりWS	ソフト施策として、プランづくりを最終目的とするWS
	情報収集WS	ソフト施策に至る情報収集を目的とするWS

表－2　WSの特徴

種別	ものづくりWS プランづくりWS	情報収集のWS
WS成果	形のある実体	形のない情報
合意形成	合意形成を必要とする	必ずしも合意形成を必要とせず
WSでの情報	拡散したのち収れんする	拡散する

2．ワークショップの利用目的別の分類

公共施設整備などワークショップ（以下WSと略記）手法を導入する場合、表－1に示すように、WSはその利用目的により、ハード整備・ソフト整備において“ものづくりWS・プランづくりWS”と“情報収集のWS”に大別できる。ここで、ものづくりWSとは、道路・公園・建物などの具体のハード施設を整備することを主たる目的とするもの、プランづくりWSとは、マスタープランやソフト施策などのソフト整備を主たる目的とするもの、情報収集のWSとは、ハード整備・ソフト整備のそれぞれの計画に際し情報の収集を主たる目的とするものを意味する。

このとき、ものづくりWSやプランづくりWSは、実際に公園や建物などの建設やマスタープランの策定など、計画そのものを明らかにすることをWSの最終目的とすることから、最終成果物に形があるWSといえる。また、このタイプのWSは、形のある実体をつくる事を目的にするため、WS参加者の合意形成が必要で、WS情報が最終的には収れんするWSといえる。

一方、情報収集のWSでは、最終の成果物に実体がなく、必ずしも合意形成を必要とせず、むしろ多様な参加者からさまざまな情報を得ることが重要であり、この点から、WSでの情報は拡散する傾向にある。また、ものづくりWS・プランづくりWSでは、WS情報は拡散した後に収れんすると考えられるため、情報収集のWSはものづくりWS・プランづくりWSに内含されるものとして考えられる。

3．末広WS

末広WSは、現在まで、住民の直接の参加を得たリアルタイムワークショップ（RWS）は5回行われており、澤田・森下らによって、第3回RWSまでの報告がなされている[1]。したがって、ここでは簡単に末広WSについて示す。

表－3　末広WSの対象施設概要

施設名称	末広公園
場所	徳島市末広4丁目
施設管理	徳島市
施設規模	1500m2
種別	街区公園

3．1　背景と経過

末広公園は、徳島市東部臨海地域の市営団地等に囲まれた静かな住宅地に位置する面積約1,500 m^2の街区公園である。昭和46年に設置されてから25年経過し老朽化が進んだため今回改修されることになったもので、末広WSは徳島県下で初めてのものづくりWSである。なお、WS導入時点では公園改修の事業化は未決定であった。

3．2　ワークショップの運営

末広WSの運営は、当初は行政・専門家グループ・住民により構成された「末広公園をつくる会」により企画・運営されたが、住民の参加が不特定少数で、かつ連続していない形態でRWSが推移したため、結果的に第1回RWS以降の企

1994	09月	9/16	○徳島市都市デザイン推進会議準備会		
	11月		○徳島市第3次総合計画策定		
	12月	12/2	○徳島市都市デザイン推進会議設置		
1995	06月	6/2	●デザイン推進会議にて末広WSの実施提案		
		【末広WS】		【徳島WS研究会(TWK)】	
	06月	6/4	○WS発足準備会	6/22	□TWK発足　準備会
	07月	7/28	○地元説明会	7/4	□第1回TWK
	08月	8/27	●プレRWS	8/8	□第2回TWK
	09月			9/14	□第3回TWK
	10月	10/8	●第1回RWS		
	11月	11/26	●第2回RWS	11/14	□第4回TWK
1996	01月			01/23	□第5回TWK
	02月	2/18	●第3回RWS	02/02	□第6回TWK
	08月		○実施設計着手		
	09月			09/30	□第7回TWK
	10月			10/05	□第8回TWK
				10/16	□第9回TWK
		10/26	●第4回RWS		
1997	03月		○実施設計完了		

図－1　末広WSの経過

表－4　末広ＷＳの参加者の構成

住民	・特定少数（参加平均25人／回） ・参加の連続性が低い ・参加者は近隣の住民、子供、保護者が多い
行政	・徳島市都市デザイン室の所管
専門家	・ＷＳ経験者は少数 ・都市計画・建築・土木・造園・大学関係が主に協力、参加 ・参加平均12人／回
設計者	・一般指名入札方式で選定 ・第４回ＲＷＳから参加 ・ＷＳは初経験

表－5　末広ＲＷＳの概要

ＲＷＳ	日時	参加者（人）	目的
プレ	1995、8/27(日) A.M9:00～	住民大人52 子供55 スタッフ30	末広公園で遊ぼう
第1回	10/8(日) P.M1:30～	住民大人14 子供12 スタッフ36	
第2回	11/26(日) P.M1:30～	住民大人15 子供11 スタッフ25	公園の起こし絵模型を作ろう
第3回	1996、2/18(日) P.M1:30～	住民大人18 子供17 スタッフ21	使い方ｼｭﾐﾚｰｼｮﾝをしよう
第4回	10/26(土) P.M1:30～	住民大人　8 子供12 スタッフ19	基本計画案から計画課題を検討しよう

画・運営は、専門家ボランティアグループを中心とする「徳島ワークショップ研究会（以下ＴＷＫと略記）」により行われた。表－４に末広ＷＳの参加者の構成を示す。

３．３　リアルタイムワークショップ(ＲＷＳ)

ＲＷＳは、イベントによるＰＲをかねたプレＷＳを含めて５回開催された。表－５に末広ＲＷＳの概要を示す。第１回ＲＷＳは、街頭突撃インタビューおよび参加者の旗揚げアンケートから意見収集をした。さらに、公園のイメージづくりを言葉でつくり、旗揚げアンケートを行った。第２回ＲＷＳでは、実際の末広公園の大きさを現地体験した上で「こんな公園にしたい」と題してグループに分かれて、公園の起こし絵模型を作った。第３回ＲＷＳでは、前回出来上がった起こし絵模型をまとめた簡易の紙模型が登場し、それを見ながら使い方シュミレーションゲームを行った。それらを元に計画案の検討課題の整理を行った。この後公園改修が事業決定され、設計者が決まった。それを受けて、第４回ＲＷＳでは、設計者が新たに参加し、第３回ＲＷＳでまとめた計画案を、設計者が模型と図面に表して参加者に提示した。設計者の説明や模型をもとにして参加者は再度設計案についての検討を行った。これらの設計プロセスは順調に進んだが、住民の参加者が一部地元自治会の支援は得たものの基本的に参加者を予め特定しない自由参加形式であったことから、複数のＲＷＳに連続して参加した住民がほとんどなく、公園づくりへの住民の意識の盛り上がりという点では、やや不足の感があった。

表－6　しらさぎＷＳの対象施設概要

施設名称	しらさぎ台地区まちづくり活動センター
事業名	街並み・まちづくり支援整備事業
事業主体	徳島市
敷地面積	1,630.72m^2（センター用地）
施設規模	床面積：約350m2、S造＋RC造平屋建
施設用途	集会施設（コミュニティ＋避難施設）、集会室（和室）、湯沸室（簡易な調理室）、便所（高齢者、障害者対応）
屋外施設	広場、駐車場スペース

４．しらさぎＷＳ

４．１　背景と経過

徳島市西部に位置するしらさぎ台は、昭和48年丘陵地に開発された面積83haの住宅団地で、現在約1100戸、3500人が居住している。団地内には７か所の公園、自治会集会所があるが、地域の核となるコミュニティ施設は整備されておらず、団地自治会からは徳島市に施設整備の要望が何度となく誓願されていた。この結果“街並み・まちづくり支援施設整備事業”を適用して、しらさぎ台地区センターが整備されることとなった。

1995	09月	09/18	○自治会・施設建設陳情書を徳島市に提出		
1996	03月	3/19	○徳島市議会陳情書承認		
	04月	4/26	○地区計画地元説明会		
		【しらさぎＷＳ】		【徳島ＷＳ研究会(TWK)】	
	06月	6/08	○自治会にＷＳ提案	06/14	□第１回ＴＷＫ
		6/21	○自治会と打合わせ	06/29	□第２回ＴＷＫ
	07月	7/06	●プレＲＷＳ	07/15	□第３回ＴＷＫ
		7/21	●第１回ＲＷＳ	07/26	□第４回ＴＷＫ
	08月	8/03	●第２回ＲＷＳ		
			○実施設計着手		
	09月			09/21	□第５回ＴＷＫ
	11月		○実施設計完了	11/11	□第６回ＴＷＫ
	12月			12/02	□第７回ＴＷＫ
1997	01月	1/25	●第３回ＲＷＳ	01/13	□第８回ＴＷＫ
	02月		○工事着手		

図－２　しらさぎＷＳの経過

４．２ ワークショップの運営組織

今回のＷＳは、専門家のアドバイスにより徳島市が企画・発案し、ＲＷＳの住民組織である「しらさぎ台自治会」が主催した。また、一連のＲＷＳは、末広ＷＳを経験したメンバーを多数含む徳島ＷＳ研究会を中心とする専門家グループのボランティアにより支援された。専門家グループは主にプログラム作成・調整を行い、行政は行政内の情報提供・調整を行った。また、しらさぎＷＳは、年度途中の発案・企画であったため、行政による予算措置が取れず、行政からの若干の事務用品の現物提供の他、ＲＷＳなどの運営費は全くない状態で進行した。

表－７　しらさぎＷＳの参加者の構成

住民	・しらさぎ台自治会がWSを主催 ・特定少数（参加平均25人／回） ・連続性を持つ ・参加者は自治会の役員・老人会・子供会の母親・主婦のそれぞれ大人
行政	・徳島市開発課の所管
専門家	・末広公園WSを経験している人が多数 ・都市計画・建築・土木・造園・大学関係が主に協力、参加 ・参加平均12人／回
設計者	・行政が入札方式で選定 ・第1回ＲＷＳから参加 ・WSは初経験

４．３ リアルタイムワークショップ（ＲＷＳ）

住民の参加を直接的に得るＲＷＳは、プレを含めて現在まで４回開催されている。表－８にしらさぎＷＳにおけるＲＷＳの概要を示す。ＲＷＳへの住民参加者は、自治会により老人会・子供会の母親・主婦・自治会役員会の中から選出された。この結果、ＲＷＳへの住民の参加形態は、特定少数で、かつ連続的な参加の

表－８　しらさぎＷＳにおけるＲＷＳの概要

ＲＷＳ	日時	場所	目的	参加者数	プログラム	木下によるＷＳのスコア：注）
プレ	1996 7/6(土) PM1:00 晴れ	しらさぎ台集会所	ワークショップを知ろう 会の名前を決めよう スケジュールを決めよう	住民 男…10人 女…22人 スタッフ 13人	STEP1…自治会会長挨拶 STEP2…講演会「ＷＳとまちづくり」 STEP3…説明会 地区センター計画づくりのＷＳ STEP4…「会」の名前を決めよう STEP5…スケジュールを決めよう STEP6…短冊メッセージづくり	・期待カード
第1回	1996 7/21(日) PM1:30 晴れ	しらさぎ台集会所	参加者同士の顔合わせ 敷地視察 ・センターの計画づくり	住民 男… 6人 女…21人 スタッフ 13人	STEP1…自治会会長挨拶、前回・今回の説明、 STEP2…自己紹介（グループ名を決める） STEP3…「月に迷ったゲーム」 STEP4…敷地視察 STEP5…休憩タイム STEP6…目標カードの選択 STEP7…センターの計画づくり（面積配分ゲーム） STEP8…グループ別の発表 STEP9…グループ別の投票（全員にシールを配布） STEP10…自治会会長挨拶	・月に迷ったゲーム ・敷地読みとりゲーム ・使い方デザイングーム
第2回	1996 8/4(日) PM1:30 晴れ	しらさぎ台集会所	・使い方を考える ・ ・ ・模型で確認 ・敷地原寸体験 ・最終合意形成	住民 男… 7人 女…19人 スタッフ 12人	STEP1…自治会長挨拶、プログラム説明、夏祭りの結果報告 STEP2…計画案の説明（設計者による模型・図面） STEP3…問題点・改善点の発見 STEP4…改善点に関するグループのまとめ STEP5…グループ別の発表 STEP6…旗揚げアンケート STEP7…今後の進め方の提案 STEP8…アンケート、自治会会長挨拶	・旗揚げアンケート
第3回	1997 1/25(土) PM1:30 晴れ	しらさぎ台集会所	・住民による自主管理のあり方	住民 男… 5人 女…15人 スタッフ 11人	STEP1…自治会長挨拶、これまでの経緯、管理運営の方針、質疑応答 STEP2…プログラムの説明 STEP3…施設運営の方針（イメージカード） …施設利用と条件・問題点/質問・回答 STEP4…グループ別の発表 STEP5…楽しい活動をさらに広げるために STEP6…旗揚げアンケート STEP7…今後のスケジュールとテーマ自治会会長挨拶	・旗揚げアンケート

注）木下勇：ワークショップによる市民まちづくりの展開、都市計画No. 194 1995 p. p. 40-41

表－９　面積配分ゲーム

部屋	Aチーム	Bチーム	Cチーム	Dチーム
大集会室	170m²	185m²	150m²	170m²
小集会室	30	40	50	40
和室	50	30	50	50
調理室	30	40	30	40
図書室	20	—	—	—
玄関廊下	25	30	35	25
トイレ共通	25	25	25	25
面積合計	350	350	350	350

形態となった。なお、参加者は全て大人である。ＲＷＳの参加者は４回とも、各団体が一つのグループに片寄らないようにくじびきにより、４グループに分かれて討議を進めた。各回毎にグループのメンバー構成は変更している。また、徳島ＷＳ研究会を中心とする専門家グループのメンバーが各グループに２人入り、進行役およびアシスタントを務めた。

プレＲＷＳでは、住民参加者にとって、“ワークショップ”という言葉を聞くこと自体初めてという人が多かったので、最初にファシリテータによる講演会「ワークショップとまちづくり」を開催し、阪神淡路大震災後の市街地の復旧に際してのＷＳの事例などを紹介するなどして、参加者にＷＳを正しく理解してもらうための情報提供を行った。そして、ＲＷＳの名称を参加者により“わくわくワークショップしらさぎ”に決定した後、短冊メッセージづくりを行った。

第１回ＲＷＳでは、最初に自己紹介を行い、グループ内のコミュニケーションを高めるために『月に迷ったゲーム』を行った。次に、参加者全員でＲＷＳ会場に隣接する計画地を視察したのち、４グループに分かれ、施設計画における「目標カードの選択」と建物の「面積配分ゲーム」を行った。表－９に面積配分ゲームの結果を示す。

第２回ＲＷＳでは、第１回ＲＷＳの結果をもとに設計者により作成された基本計画段階での模型と図面が提示された。その後のグループ別の検討では設計者案に対する議論がなされ、グループ発表時には、「デザインよりも機能を重視して欲しい」・「専門家の案を見て感動したが、その反面デザインに拘りすぎているのではないか」などの意見が出された。

表－１０　しらさぎＷＳ：
住民参加者アンケート調査の設問

●参加者の属性
・年齢、・性別、・所属
●ＲＷＳ参加前
・ＷＳの開始前にＷＳのことを知っていたか、・ＲＷＳへの参加状況、ＲＷＳに参加するときの意識、・参加者のＲＷＳへの期待
●ＲＷＳに参加して
・参加してＲＷＳは楽しかったか、・考えていたことがＲＷＳでとりあげられたか、・ＲＷＳで自分の考えが言えたか、・ＲＷＳ参加者の意見がまとまったか、・ＲＷＳでの参加者の意見が今後計画に反映されると思うか、・ＲＷＳの開催数は多いか少ないか、・生活経験はＲＷＳに役だったか、・ＲＷＳに参加して住民参加を体験できたか、・ＲＷＳで知り合いが増えたか、・ＲＷＳで近所の人とふれあえたか、・ＲＷＳで自分の意見が言えたか、・ＲＷＳでみんなの意見を聞くことができたか、・力をあわせて計画できたか
●ＲＷＳの運営面での内容や改善点について
・ＲＷＳの内容は難しかったか、・ＲＷＳのプログラムの数は、・ＲＷＳの進行時の説明の早さは、・ＲＷＳで専門用語の使用によるわかりにくさは、・ＲＷＳでの説明の過不足は、・ＲＷＳの時間は

表－１１　しらさぎＷＳ:住民参加者のアンケート調査
（第２回ＲＷＳ、回答者数２６名）

●参加者の属性	年齢	20代以下：0%、30代：23% 40代：35%、50代：4% 60代：19%、70代以上：8%
	性別	男性：19%、女性：81%
●ＲＷＳ参加前	ＲＷＳの参加状況	プレＲＷＳ参加：88% 第１回ＲＷＳ参加：85%
	ＲＷＳの参加意識	積極的参加：50%、やや積極的参加：15%、やや義務的参加：27%、義務的参加：4%、わからない：4%

●ＲＷＳに参加後 （右欄数字は、回答者の百分率%）	思う	少し思う	あまり思わない	思わない	無回答 わからない
参加してＲＷＳは楽しかったか	54	34	8	0	4
考えていたことがＲＷＳでとりあげられたか	23	65	8	0	4
ＲＷＳで自分の考えが言えたか	35	61	0	4	0
ＲＷＳ参加者の意見がまとまったか	27	58	15	0	0
ＲＷＳでの参加者の意見が今後計画に反映されると思うか	31	58	11	0	0
生活経験はＲＷＳに役だったか	31	42	19	0	4
ＲＷＳに参加して住民参加を体験できたか	54	38	0	0	0
ＲＷＳで知り合いが増えたか	23	19	38	8	12
ＲＷＳで近所の人とふれあえたか	15	31	27	8	19
ＲＷＳで自分の意見が言えたか	27	38	15	4	16
ＲＷＳでみんなの意見を聞くことができたか	65	27	0	0	8
力をあわせて計画できたか	34	50	8	0	8

第３回ＲＷＳは、実施設計終了後に行われたもので、施設竣工後の、施設の管理・運営を目的として開催された。この中で、運営の方針、利用条件、利用･活動状況の推測と希望、問題点などが検討された。

５．調査

５．１ 住民参加者のアンケート調査

末広ＷＳでは、ＲＷＳに対する住民参加者の意識は、第４回ＲＷＳにおいてアンケート調査を実施している。しかしながら、末広ＷＳの住民の参加は、不特定でほとんどが不連続の参加であり、かつ、第４回ＲＷＳでのアンケート調査数も５名（大人２名、子ども３名）と少数であったため、ここでは割愛する。

しらさぎＷＳでは、第２回ＲＷＳ終了後に住民参加者のアンケート調査を行っている。しらさぎＷＳでは、住民の参加は、特定かつほとんどが連続の参加形態であり、アンケート回答者数も26名確保できたため、ここでは、しらさぎＷＳにおけるアンケート調査結果を示す。アンケート調査での設問、及び、アンケート調査結果の一部を表－１０、１１に示す。アンケートの回答者は26名であり、このうち、プレＷＳへ参加した人が23名、第１回ＲＷＳに参加した人が22名であった。表－１１よりＲＷＳへの参加者は、「積極的に」あるいは「やや積極的に」参加した積極的参加者が65%、「やや義務的に」、「義務的に」参加した人が31%いることがわかる。

５．２ 専門家等ヒアリング調査

専門家等のヒアリング調査は、第４回末広ＲＷＳ終了後、そして第２回しらさぎＲＷＳ終了後の、1996年10月から11月の時期に行った。ヒアリング対象者は、末広ＷＳおよびしらさぎＷＳに参加した行政３名、専

表－１２　ヒアリングでの設問

・ＷＳは有効だったか、・ＷＳに問題を感じたか、・ＷＳの改善点は、・ＷＳの結果としてＷＳから得られる情報で不足するものは、・ＷＳでどこまでの合意形成が出来ているのか、・ＷＳの場での意志決定は誰が決めたのか、・ＷＳの持つ“怖さ”を感じるか、・ＷＳの結果の評価はどこで誰がすればよいと思うか、・ＷＳの回数は多かったか少なかったか、・模型を掲示するタイミングは適切であったか、・ＷＳを道路のように行政プロセスの中に位置づけるのか、・行政の中の合意形成にＷＳはどのような役割を持つか

表－１４　ヒアリング内容－２：ＷＳと設計者のかかわり

区分	ヒアリング時の意見
行政	設計者の自由度が少なく設計者がドラフターになってしまっている、設計者の自由度をどこまで認めるか／住民と設計者・専門官とのイメージの食い違いをなくすための作業が必要
専門家	（末広）設計者もＷＳを体験すべき／設計者の選択の問題もある／設計者ごとにＷＳにたいするスタンスが違う／設計者の思想を参加者に伝えるすべがない
設計者	有意義な体験をした、半分期待・半分不安、期待：利用者の顔や声を見聞きしたこと、愛着を持って施設を使ってもらえる、不安：今までの設計者のスタンスが骨かされる（衝撃的）／設計者の選定のシステムに問題、あらたな方式が必要（今回は指名入札方式）／ＷＳ方式を併用して設計することで、だれが責任をとるのかが明確でなかった／ＲＷＳに設計者が関与するタイミングの改善が必要／住民の声をもっと聞きたかった、住民の意見の聞き取りは非常に有意義／設計者と住民との考えのずれがある

表－１３　ヒアリング内容－１（抜粋）

	行政	専門家	設計者
	３名	５名	３名
ＷＳでどこまでの合意形成が出来ているのか	どこまでいっても全員一致できないだろう／多数決だけでなく少数意見も通っている／声の大きい人や意志表示のできる人の意見が通っている／自分たちのイメージと違っている気がする	ＷＳは果たして合意形成のためのものなのか／住民に参加してもらって、少なからず自分たちの意志でつくろう、考えようとする意識に持っていくことが合意形成／絶対多数で決められるものではない／合意形成は大変難しい／合意は出来ていない、ＷＳでの意見抽出に終わっているだけ／合意形成ができているかどうかわからない／基本的に合意形成は難しい、全員一致は無理	●末広：末広ＷＳでは参加者に連続性がないので、合意形成がうまく出来ているか疑問／100%の合意は無理／合意はほとんどできていないと思う、意見がでただけ／●しらさぎ：集約というか、バラバラの意見を聞いて設計者なりにまとめた／自治会が単にまとめただけで、合意形成でないかもしれない／自分の意見が変化していくのもＷＳの特徴
ＷＳの場での意志決定は誰が決めたのか	・住民の意思決定が大／行政はある程度住民にまかせた／住民・行政・専門家・設計者の全ての意志がはいっている／末広、しらさぎとも行政が最終意志決定者だろう／決定権を住民がもたなければ住民参加とはいえない	ＷＳによって意志決定者は変わる／本来は、参加者全員が意志決定できるのがよい／行政と設計者が決めている／しらさぎＷＳについては設計者だろう、設計者がみんなの意見をうまくまとめている、設計者のレベル次第	●末広：設計業務からすれば予算を持っている行政、本来は住民が決めるべき／スタッフがまとめたのでは、最終的には行政が決めていると思う／●しらさぎ：最初は声の大きい人が決めていったと思う／責任は設計者にあると思っている
ＷＳの持つ“怖さ”を感じるか	設計者がＷＳに参加して誘導してしまう／行き先の見えない怖さ／最終意志決定が行政にある限り、怖さは感じない／ＷＳを悪用する事は出来ないだろう／感じない、どういう方向になっても参加者の意向と思う	ＷＳが行政の免罪符的に使われないだろうか／人を誘導する怖さは常につきまとう／怖くても続けるべき／結果や先がが見えない、とんでもないものができる可能性がある／ＷＳそのものに頼り切っている怖さ	行政や専門家が住民を誘導する怖さ／行政が住民参加の結果を利用する怖さ／ＷＳが道具として使われる怖さ、誘導していくこともできるだろう

門家５名、設計者３名の計11名で、年齢層は11名のうち９名が40代、２名が30代で、いずれもそれぞれの専門分野での実務経験を15～20年相当有する。ヒアリングは、一人ずつ個別に、一人あたり1.0～1.5時間程度行った。また、行政３名と専門家５名のうち４名は、末広及びしらさぎの２つのＷＳを経験している。設計者３名のうち２名は、ＷＳの知識は有していたものの、ＲＷＳに参加すること自体が初めてであり、残り１名は、若干のＲＷＳへの参加経験を持っていたが、設計者全員、ものづくりＷＳのなかでの実施設計は初めてであった。表－１２、１３、１４にヒアリング結果を示す。表－１４は、「ＷＳと設計者のかかわり」として、当初の設問項目にはないが、専門家ヒアリングにおける設計者に関する意見や、表－１３に記載した以外の設計者のヒアリング結果を示したものである。

６．考察

６．１ ものづくりＷＳの課題

(1) 合意形成

ＷＳにおいて、よく合意形成という言葉が使われるが、合意形成という言葉は、ものづくりＷＳにおけるＲＷＳの場でどのような意味を持つのか以下に考察する。

表－１１の住民参加者アンケート調査結果で、「ＲＷＳ参加者の意見がまとまったか」の設問に対して「思う、少し思う」と答えた人は85%に達している。また、「考えていたことがＲＷＳでとりあげられたか」「ＲＷＳで自分の考えを言えたか」「参加してＲＷＳは楽しかったか」の設問に対して「思う、少し思う」と答えた人は、それぞれ88%、96%、88%に達している。これらのことから、しらさぎＷＳを例にとると、住民の合意形成の意識は比較的高い結果であるものといえる。この要因は、ＲＷＳにおいて①住民参加者が自分の意見を発言できたり、自分の考えていたことが取りあげられたこと、②ＲＷＳが紛糾することなく楽しい雰囲気で進行したこと、③ＲＷＳの場で簡易ながらも旗揚げアンケートなどにより参加者の意見の多少をリアルタイムに参加者に共通に認識できるワークショップ技術を使用したこと、④住民のＲＷＳ参加者が特定かつ連続的参加であったこと、などが考えられる。

一方、表－１３のヒアリング結果における行政・専門家・設計者の意見は、「全員一致は無理」・「基本的な合意形成は難しい」・「合意形成ができているかどうかわからない」など住民に比べて合意形成の達成度が低い意見が多く出された。これは、しらさぎＷＳにおいてはＲＷＳの主催は住民自治会ではあるものの、ＲＷＳの運営をはじめとして、ＲＷＳの主体的なかかわりは、住民参加者よりも行政・専門家・設計者グループの方が強く、特に行政・専門家・設計者グループにおいてＲＷＳ情報の活用面での意識の高さが、合意形成達成度の低い評価につながったものと思われる。

自然学者の今西錦司は、その著書の中で、集団の人間にとって地理的帰属性は存在するが文化的帰属性は存在しえないことを示している。このことは、人間の集団における意見の100%の合意形成はあり得ないことを示しており、ＲＷＳの場でも100%の合意はあり得ないと考えられる。ものづくりＷＳは、住民・行政・専門家・設計者の４者により構成され、住民だけや行政だけといった個別の意見が優先されるものではなく、ここでは４者の協同作業により進められることが大切になる。ＲＷＳを含めてものづくりＷＳにおける合意形成の意味は、ＲＷＳでの住民の意見や要望を一つに集約することではなく、参加者の意見の相違の存在を前提として、住民の参加者による多様な意見とその多少が住民に認識され、これらの多様な住民の意見が倫理観・公正さを持った行政・専門家・設計者の手によりうまく活用されるＷＳのシステムを、住民・行政・専門家・設計者の４者が共有化することといえる。

(2) 意志決定

表－１３のヒアリング結果によると、ＷＳの意志決定は、行政・専門家・設計者の各個人により多様な受け止め方をしている。意見の大勢としては、「住民が決める」・「住民・行政・専門家・設計者の４者が決める」のが望ましいが、現状では「行政が決めている」・「設計者が決めている」・「声の大きい人が決め

ている」などの意見が比較的多く出された。重要な点は、末広ＷＳ・しらさぎＷＳともＷＳの運営にあたり、誰が・どのような意志決定を・どんな場面で行うのかという意志決定の議論があまりなされないままにＷＳが進展したため、ＷＳ関係者においてＷＳの意志決定の捉え方が個々により異なっているという点である。

ものづくりを始めとする具体の空間整備において設計者が必要とする情報は、「枠組みの情報」・「利用の情報」・「空間地域の情報」[2]があり、末広ＷＳ・しらさぎＷＳ双方とも、ＷＳ開催の時間的制約から、実施設計に至るＲＷＳでは「利用の情報」を主に収集するＲＷＳが開催された。そして、ＲＷＳの観察の結果、ＲＷＳ参加者の意見の集約の手段としては簡単な旗揚げアンケートが実施されたにすぎず、具体設計において必要な設計上の諸条件を決定する意志決定そのものは、曖昧な状態におかれ、結果的に、設計者の判断を行政担当者が承認する形でＷＳを含むものづくりの設計作業が進行したといえる。ここには、ＷＳとの関連でみれば計画的な意志決定はなく、行政担当者や設計者個人の能力・倫理観・公正さなどに頼っているというあやうさも見受けられる。

実際に施設を整備するものづくりＷＳにおいては、ＷＳの各場面で様々な意志決定が必要となる。この意味で、意志決定が必要なＷＳを“ものづくりＷＳ・プランづくりＷＳ”、意志決定が不要なＷＳを“情報収集のＷＳ”ということができる。浅海らは、「参加のデザイン」の三要素として「プロセスのデザイン」・「プログラムのデザイン」・「参加形態のデザイン」を示している[3]。公園整備や建物整備などの具体のものづくりにおいては、ものづくりの情報を収れんしかつ決定していくことが不可欠であり、ものづくりＷＳにおいては浅海らの示した３要素の他に、「意志決定のデザイン」が必要になるものと考えられる。この「意志決定のデザイン」においては、意志決定の対象、意志決定の構造化、意志決定者の決定などの作業が必要と考えられる。

(3) ＷＳの怖さ

表－１３に示すヒアリング結果からは、ＷＳのもつ怖さとして、「行き先の見えない怖さ」・「住民を誘導する怖さ」・「ＷＳが行政の免罪符に使われるかもしれない怖さ」等が指摘された。ＷＳは、住民参加の代表的な手法として、まちづくりにおいても様々な場面で導入されているが、現時点では、ＷＳの企画者や運営者などの住民参加にたいする正義感・信頼感によりＷＳが適正に運営企画されているものと思われる。しかしながら、今後さらにＷＳの導入の増加により、ヒアリングの指摘にもあるような住民を故意に誘導したり、ＷＳを住民参加の免罪符的に利用したりするおそれもないとはいえない。このためには、ＷＳの規模にもよるが、ＷＳが適正に運営しているかどうかの評価システムの確立が必要で、同時に、誰がＷＳを評価すればよいのかといった評価者の選定の検討も必要であろう。ＷＳの評価者には、もちろん倫理観・公平性・専門知識などが要求される。当面は、ヒアリングの意見にもあるようにＷＳを「怖くても続ける勇気」を持つことが大切である。

(4) ＷＳと設計者のかかわり

ＷＳと設計者のかかわりについては、行政の設計発注形態にも関連した設計者の選定の問題と、ＷＳそのものの設計者のかかわり方の問題の２点がある。

設計者は、末広・しらさぎの双方とも指名競争入札により選定された。末広ＷＳでの公園の設計発注は、第３回ＲＷＳ後であるため、設計者は当初からＷＳに参加しようにも参加できない状況であった。その反面、設計者はあらかじめＷＳと連動しながら末広公園の設計作業が進行することは、設計業務受注前の業務閲覧時の情報として与えられていた。一方、しらさぎＷＳでの建築の設計発注はスケジュール的に実施設計者が第１回ＲＷＳの直前に決定したため、設計者は第１回ＲＷＳから参加することができた。その反面、事前に設計作業にＷＳが連動していることの情報は設計者になく、設計業務受注後はじめてＷＳの存在を知った。これは、設計者がＷＳの知識を持つ持たないに関係なく設計業務が発注されことを意味する。なお、末広・しらさぎの双方の設計作業とも、ＷＳと連動することによる設計費の増額は取られていない。このように、末広・しらさぎの双方のＷＳとも設計者の選定については多くの問題を残す結果となった。ものづくりＷＳ

における設計者の選定においては、ＷＳに対して知識と理解のある設計者を、ＷＳと設計作業との関係の情報を明らかにした上で、企画段階から設計者がＷＳに参画できるスケジュールで設計者を選定することが望まれる。発注方式も指名競争入札を含めて、ものづくりＷＳにふさわしい方式を選定する必要がある。

ＷＳそのものと設計者とのかかわりについては、「設計者の自由度が少なく、設計者がドラフターになってしまっている」・「設計者ごとＷＳに対するスタンスが違う」・「設計者の思想を参加者に伝えるすべがない」・「設計者と住民との考えのずれがある」などの、ものづくりＷＳにおける根本的な課題が指摘された。現時点では、これらのすべてに対して、改善策や提案は持たないため、今後の研究課題としたい。ここでは、設計者の自由度について以下に若干述べる。

ＲＷＳには“意見の限定性”・“参加の機会の限定性”・“参加人数の限定性”・“年代層の限定性”といった複合的な参加の限定性が見られる[4]。このことは、ＲＷＳは住民参加の手法として有効ではあるが、完全ではないことを意味し、ＲＷＳから得られる情報もまた、重要で尊重すべきではあるが完全でないことを意味する。したがって、特に設計者の役割は、ＲＷＳの場で得られた情報に縛られてしまうのでなく、こうしたＲＷＳの限界を理解した上で、ＲＷＳにおいて、ものづくりのための情報のうちどんな情報が得られて、どんな情報が足りないのかを明らかにし、そして、不足する情報を収集し、設計作業に積極的に役立たせなくてはならない。できればＲＷＳの場でこうした設計者の視点を説明できる場が必要であろう。このようにみると、「設計者の自由度が少なく、設計者がドラフターになってしまっている」ということは設計者の役割を果たしていないことになろう。

６．２　ものづくりＷＳを成功させるための要件

ものづくりＷＳが成功するということは、『完成された施設の評価が高いこと』・『完成された施設や施設の運営維持管理にＷＳの意見が最大限に生かされること』の二つの要件が達成されることが必要と考えられる。さらに、後者の要件はＷＳでの意志決定力の強さに左右されると考えられる。このＷＳにおける意志決定力の強さを規定するものとして、以下の４点について考える。

(1) ＷＳに対する住民の参加形態

住民の参加形態は、不特定・不連続参加よりも特定・連続参加の形態の方が、強い「住民の声」を生み出し、ＷＳを構成する行政・専門家・設計者からも、高い信頼感が得られやすい。末広ＷＳでは、住民の参加形態は不特定・不連続であり、ヒアリング時において設計者から「連続性のない一過性の住民の意見をどのくらいの重みで評価すれば良いのか」・「参加者に連続性がないので合意形成がうまくいっているのかどうか疑問」などの意見がだされた。一方、しらさぎＷＳでは、住民の参加は特定・連続であるため、ヒアリング時においても末広ＷＳで指摘されたような不安点は聞かれなかった。ものづくりＷＳにおいては、住民の参加は特定・連続の参加形態による方が好ましいと考えられる。

(2) ＷＳにおける意志決定の明確さ

ものづくりＷＳにおいては、住民・行政・専門家・設計者の４者により検討が進むということで、ややもすると、ＷＳのどの段階で、誰が、ものづくりの意志決定をするのかといったことが曖昧になることがある。実際、末広、しらさぎ双方のＷＳ事例においても、ＷＳにおける意志決定権は明確に示されず、第２回しらさぎＲＷＳにおける建物衣装デザインについての設計者と住民参加者の議論においては、建築衣装デザインの意志決定権を誰が最終的に持つかが不明確であるということに起因した意見の交換が見受けられた。

公共施設整備においては、基本的に意志決定権を有する行政が、ＷＳの場にゆだねることのできる意志決定の範囲をあらかじめＷＳの場に明示しておくことが重要で、このためには、ものづくりＷＳにおいて先にも示した「意志決定のデザイン」が必要と考えられる。

(3) ファシリテーターのリーダシップと倫理観

ＷＳでの意見が施設の完成段階まで最大限に活かされるためには、ＷＳを構成する住民・行政・専門家・設計者の４者のうち、いずれかに片寄ったＷＳ意見を集約するのでなく、４者に中立・公平な立場を堅持し、

かつ、公共施設整備の場合、一般の整備理念から大きく逸脱していないＷＳを運営することが必要となる。このとき、専門家の中でも特に、ＷＳのファシリテータの人材のもつリーダーシップ性と倫理観が大きく影響する。

(4) 設計者の能力と倫理観

設計者が存在するものづくりＷＳにおいては、ＷＳに理解ある設計者の存在が前提条件であり、この上で、設計者の能力と倫理観がものづくりＷＳの成功に大きく寄与する。このためには、設計者の資質だけでなく発注形態をはじめとする設計者の選定システムなどの、設計者を取り巻く環境を整備することが求められる。

７．おわりに

本研究では、ものづくりワークショップ（ＷＳ）として徳島市末広公園ＷＳと徳島市しらさぎ台地区センター建物ＷＳの２つの事例を題材にして、公共施設整備にものづくりＷＳを適用する場合の課題や適用性などについて検討した。検討結果を以下に示す。

(1) 合意形成

ヒアリングの結果、行政・専門家・設計者は、リアルタイム・ワークショップ（ＲＷＳ）における合意形成の達成度は住民が考えているよりも低いことがわかった。ＲＷＳを含めてものづくりＷＳにおける合意形成の意味は、ＲＷＳでの住民の意見や要望を一つに集約することではなく、参加者の意見の相違の存在を前提として、住民の参加者による多様な意見とその多少が住民に認識され、これらの多様な住民の意見が倫理観・公正さを持った行政・専門家・設計者の手によりうまく活用されるＷＳのシステムを、住民・行政・専門家・設計者の４者が共有化することといえる。

(2) 意志決定

実際に施設を整備するものづくりＷＳにおいては、ＷＳの各場面で様々な意志決定が必要となる。したがって、ものづくりＷＳにおいては「参加のデザイン」として「プロセスのデザイン」・「プログラムのデザイン」・「参加形態のデザイン」の他に、「意志決定のデザイン」が必要になるものと考えられる。

(3) ＷＳの怖さ

行政・専門家・設計者は、ＷＳのもつ怖さとして、「行き先の見えない怖さ」・「住民を誘導する怖さ」・「ＷＳが行政の免罪符に使われるかもしれない怖さ」等を感じていることがわかった。ＷＳは、住民参加の代表的な手法として、まちづくりにおいても様々な場面で導入されているが、現時点では、ＷＳの企画者や運営者などの住民参加にたいする正義感・信頼感によりＷＳが適正に運営企画されているものと思われる。

(4) ＷＳと設計者のかかわり

設計者の選定においては、ＷＳに対して知識と理解のある設計者を、企画段階から設計者がＷＳに参画できるスケジュールで設計者を選定することが望まれる。発注方式も指名競争入札を含めて、ものづくりＷＳにふさわしい方式を選定する必要がある。

(5) ものづくりＷＳの成功の要件

ものづくりＷＳが成功するということは、『完成された施設の評価が高いこと』・『完成された施設や施設の運営維持管理にＷＳの意見が最大限に生かされること』の二つの要件が達成されることが必要と考えられる。後者の要件は、ＷＳでの意志決定力の強さに左右され、これは①ＷＳに対する住民の参加形態、②ＷＳにおける意志決定の明確さ、③ファシリテーターのリーダシップと倫理観、④設計者の能力と倫理観に影響されるものと考えられる。

徳島市で開催された２つのＷＳは、まさに試行錯誤で進行した。しらさぎ第３回ＲＷＳでは、施設の運営管理のＷＳであり、このＷＳに参加する機会を得て、使い手の住民が参加する「運営管理のＲＷＳ」は、Ｗ

Ｓ手法になじむという印象を持った。末広・しらさぎとも、それぞれあと１回程度のＲＷＳが予定されている。今後、ものづくりＷＳの評価方法や、維持管理・運営の視点での研究を進めていきたいと考えている。

謝辞：本研究を遂行するにあたり、徳島市・徳島ＷＳ研究会・末広公園ＷＳ参加者・しらさぎＷＳ参加者・しらさぎ台自治会の方々からは種々のご協力やご助言をいただきました。ここに感謝の意を表します。

参考文献：

[1] 澤田俊明、森下善博ほか：屋外生活空間整備におけるワークショップ手法の適用性に関する一分析　ー徳島市末広公園のワークショップ事例を題材にしてー、環境システム研究 Vol 24、1996、p.p.211-215

[2] １と同じ、p.p.219-220

[3] 浅海義治、伊藤雅春他：参加のデザイン道具箱、世田谷まちづくりセンター、平成５年８月

[4] １とおなじ、p.p.215-216